

令和元年度 奈良市立飛鳥幼稚園 研究実践概要

園長名 新井 雅枝

全園児数 18名

1. 研究主題 生き生きと主体的に活動する幼児の育成
～さまざまな環境に自らかかわる姿を通して～

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

核家族化や少子化が進んでいる昨今、園児数も減少してきて、さまざまな人々や環境とのかかわりが希薄になりがちである。幼児をとりまく園内外の環境の変化にも対応しつつ、自ら環境にかかわっていこうとする姿勢を育み、生き生きと主体的に活動できる幼児の育成を目指して主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

さまざまな活動を通して多様な経験を積み重ねていくことで自信を持ち、身近な人を含めた環境に自らかかわろうとする意欲をもって、生き生きと活動する幼児を育む

②研究の重点

- ・研究主題について共通理解を図り具体的な取り組みの方法を探る。
- ・人を含めたさまざまな環境とのかかわりを通してコミュニケーション力や主体性を育むための環境構成や援助の在り方を探る。
- ・地域、家庭との連携を密にし、深めていく。

③活動の方法

《2年保育・4歳児》

○『カルピス作りたい』(5月)

園庭の草花を使って色水遊びを楽しんだ。パンジーの花びらからはいろいろな色が出て、単色や混色を試して「こんなきれいなピンクや」「わあ、お茶みたいな色や」などできた色を友達に知らせ合っていた。するとA児が「先生、カルピス作りたいねん」と言いに来る。「白か…何を使ったらいいかな?」と投げかけると、園庭を見回して「そうや!」とクローバーの花を摘んで来た。一本試してみるが色は出ない。三本位入れて擦ってみるがやはり色は出ない。「あかんなあ」とA児はがっかりしていた。翌日、色水の場にタライと石鹼を置いておく。それを見つけたA児は「先生、これ使っていいの?」とたずね、水を入れたタライの中で石鹼を溶かし始める。少しずつ白くなってくる水を見て「カルピスができそう」と知らせに来た。それを聞いてB児も「手伝ってあげる」と、一緒に石鹼を溶かし始め、白いカルピスが完成した。コップに入れて「ほら!カル

ピスが完成したよ」と、友達や保育者に嬉しそうに見せていた。

(反省・評価)

ピンクや黄色、紫などきれいな色のジュースができてくるのを見て、A 児は白い色のカルピスが作りたいと思いついた。白い花のクローバーを試すが色は出なかった。A 児のがっかりした姿につい石鹼という材料を提示したが、本来もっといろいろな材料を試してみる機会にしたら学びにもつながった。しかし『やりたい』気持ちが実現できたことは子どもにとって大きな喜びになったと考える。

○『ひとりぼっちはかわいそう！』(6月)



ある日、A 児が通園途中でカタツムリを見つけて持って来た。保育室で飼おうということになり、みんなで図鑑を見て家の作り方や餌を調べた。飼育ケースの中に割れた植木鉢やアジサイの枝を入れるなどして家は完成した。キュウリやニンジン、卵の殻などを家から持って来たり、ケースを洗ったりして世話をしていた。ある日 B 児がケースを覗き込んで「何かひとりぼっちじゃ可哀そうやな」とつぶやいた。聞いていた C 児、D 児も「ほんとやな」「友達探そう」と言い出し、小雨の中傘をさしてみんなで園庭に出て行った。畑のところで2匹見つけたので保育室に戻って「よかったね。友達見つかったよ」と飼育ケースに入れて満足そうな顔をしていた。

(反省・評価)

カタツムリに興味をもって飼育の仕方を調べたり、世話をしたりして触れることができた。4 歳児のこの時期『友達と一緒に楽しい』と感じて生活している。その思いが一匹だけで飼っていたカタツムリと重なり、友達を探してあげようという気持ちにつながったと思う。雨が降っていても「傘がある」と積極的に行動する姿が見られた。

○『おねがい…カメさん♪』(11月)

薬剤師の先生が手洗い指導に来てくださった。汚れに見立てたクリームを塗って石鹼で手洗いをする。きれいに洗ったつもりでもブラックライトを当ててみると「指の間に残っているね」「手首も洗おうね」と、自分達の洗い残しが目に見えてわかった。そこで手洗いの歌と一緒に正しい洗い方を教えてもらった。翌日から手洗い場では歌声が聞こえ、指の間、爪、手首などしっかり洗おうとし、友達と顔を見合わせながら楽しく手洗いをする姿が見られた。

(反省・評価)

家庭や園でもうがい、手洗いの大切さを話しているが、なかなか浸透しにくいところがある。特に水が冷たくなってくると簡単に済ましてしまうことが多い。しかし汚れが目に見えたことで『手にはこんなにばい菌がついている』『丁寧に洗わなくては』という意識がもて、専門的に教えてもらうことで貴重な経験ができた。

○『ドキドキ、ハッピー放送』(2月)

入園時よりずっと聞いてきた5歳児の『ハッピー放送』(降園前の放送)、2学期になると冒頭の「お帰りの準備はできましたか?これからハッピー放送を始めます」をいつも真似して言っていた。声を聞くと「今日は



～ちゃんや」と興味をもって耳を傾けていた。そして2月の中旬から自分達もハッピー放送に参加できることになった。「先生、だれから?」「順番は?」と、楽しみに待つ声が聞かれた。いよいよ初日、最初のA児は「ドキドキする…でもまかして!」と5歳児が迎えに来てくれると、手をつないでもらって職員室に向かった。聞いているみんなもドキドキした顔をしていた。園長先生

の援助で「ばら組の～です。今日はお花を作りました。頑張りました。1組さんのために作りました」と恥ずかしそうではあったが言えた。保育室では「うまく言えたね」と拍手が起こった。照れくさそうに帰ってきたA児にもみんなが拍手を送った。放送に行く楽しみがみんなの中に広がっていった。

(反省・評価)

ずっと憧れていたハッピー放送に1組のお兄さん、お姉さんと一緒に参加することができて喜びは一入だった。迎えに来て手をつないで連れて行ってもらうことで安心した気持ちになれたと思う。またコミュニケーションをとるうえで大切な『言葉』や人に伝えるための正しい言い方など、日々の積み重ねの中で少しずつ身に付いていくものと考える。

《2年保育・5歳児》

○『秘密基地を作ろう』(5月～2月)



4歳児の頃から〈家・秘密基地づくり〉を親しんできた。4歳児の時はダンボールのみで家や巨大迷路を、5歳児の1学期ではクラスで組み立てた木枠を使って段ボールの基地を、2学期になり「全部、木で作りたいたい」という思いから、金槌や釘を使った木工遊びを通して〈秘密基地づくり〉が始まった。形が仕上がってくると「屋根があったら本物みたい」「ここは窓やから開けておこよう」と、『より本物らしい秘密基地をつくりたい』という意欲が高まってきた。屋根の素材や壁の色など、遊びの時間や弁当後の休憩中に取り組む幼児の姿があった。毎日、少しずつであるが取り組み「先生、絵の具つかっていい」と、絵の具で色をつけたり、保育者が用意していた屋根の木枠に素材を打ち込んだり、『本物らしさ』を考えながら遊ぶ様子があった。出来上がった時は「みんなの秘密基地だ」と喜びあい、互いに基地の『よいところ』を認め合う姿があった。その後も絵本を読んだり、宝探しの地図をかいたり、編み物をしたりと子どもたちで好きな道具を持ち込んで遊びに活用していた。

(反省・評価)

保育者は子どもたちの『本物らしくしたい』、『やってみたい』という思いを大切にしてきた。子どもたちにとっては『本物』に近づけるにはどうすればいいのか考えるきっかけとなった。遊びの中で友達とイメージを共有し、アイデアを自分なりの言葉で伝えたり、自分のもつビジョンやこだわりを実現しようと取り組んだりする姿があった。保育者は「いいね」と声をかけ認めながら、実現のために背中を押したり見守ったりしてきた。幼児が見るビジョンや納得のいくアイデアなど、道具や素材の特性をじっくり味わいながら、『本物』に近づけるには時間はかかった。しかし、完成した時の感動は幼児達にとって、実現した達成感を味わいながら大きく心を揺さぶる経験に繋がったと考える。



○『おじいちゃん、おばあちゃんありがとう』(11月)

毎年、地域の公民館に集まり、あすか敬老会の方と交流をしている。園児は運動会でのリズム表現を披露したり、わらべうた遊びをしたりして年配の方々と触れ合う。地域の方に拍手をもらったり、「よくできたね」と認めてもらったりすることで園児たちは大きな自信をつけてきた。昔遊びの時間では、剣玉・あやとり・紙風船・折り紙・おはじきといった遊びを覚えてもらいながら

触れ合って一緒に楽しんだ。会の最後では幼児がつくった葉や地域の方が用意してくださったプレゼントを渡し合い、終始笑顔で互いに関わることができた。「僕のおばあちゃんは住んでいるところが遠いんだ。」と、園児たちも普段会えない祖父母を思い出しながら関わっていた。

(反省・評価)

リズム表現への拍手や声かけなど、あすか敬老会の方々の温かさが感じられ、園児たちも親しみをもって関わることができた。昔遊びでは、自分たちが一緒にしたい遊びをしてもらうことで、途中自分たちの祖父母を思い出しながら地域のおじいちゃんやおばあちゃんに関わることができた。この会の意義として、園児は温かく包み込む様な優しさに触れたり、地域の方々への感謝の気持ちをもったりするよい機会となった。



○『友達になろうよ』(3月)



年度始めに極楽坊保育園との交流予定を立てている。令和3年度の統合に向け、今までよりも柔軟に交流できるように話し合い、お互いの大きな行事だけではなく、普段の遊びや生活レベルで関わりがもてる様に職員同士で意識してきた。幼稚園の卒園式では、園庭の築山に登り色とりどりのポンポンを持った保育園の子どもたちが「卒園おめでとう」「また小学校でも会おうね」とお祝いの言葉を送ってくれた。園児や保護者も感動し、「ありがとう」と言葉を返し、互いに「小学校でもよろしく」と思いを伝え合っていた。

(反省・評価)

隣接園として長年続けてきた保幼交流だが、来年度の統合を意識することで今までの関わりを考え直す機会となった。統合に向けての交流初年度は、様子を見ながら引き続き年間を通した保幼交流と普段の何気ない関わりを目指してきた。互いに『共通のねらい』というレベルには至らなかったが、三学期は保育者同士、『関わろう』とする意欲がもてた様に思う。子どもたちも『交流』としてではなく、『遊び』に行く感覚で隣の園庭を借りたり、一緒に関わったりすることができ、よい経験になった。次年度はさらに『交流』から『遊び』への要素を深めていきたい。

5. 研究の成果

○保育者が一人一人の心の動きを感じとり、環境や援助の工夫で興味関心をひきだすことで、幼児がもっと自ら意欲的に活動しようとする姿につながった。

○さまざまな周りの環境にかかわり幼児が感じたことを、保育者が共感し他の幼児にもイメージを広げていくことの大切さを再確認できた。

6. 今後の課題

○身近な環境や人とのかかわりの中で感動体験を積み重ねることで、豊かな心が育つと思われる。保育内容の充実を図るとともに、環境構成の工夫に努めていきたい。

○少人数集団の利点を生かしながら、保育園児と交流の場をより深めていきたい。